

次年作に向けて

秋に稲わらを

すき込みましょう

「秋耕」とは？

稲わらの秋すき込みのことで、秋すき込みや秋おこしという表現もあります。代かきの直前ではなく、稲刈り後の気温の高い時期にすき込むことを指します。



早めの稲わら分解による生育上のメリット



○稲わらが緩やかに分解されることで、生育初期の窒素不足を回避できる。

> 春耕に比べて稲わらの急激な分解が抑制されるため、生育初期に必要な窒素を確保できます。

○ワキ（硫化水素）を抑制し、根腐れ病になりにくい。

> 稲わら分解による土壌の急激な還元状態を防ぐことができます。

○メタンが発生しにくい圃場になる。

> メタン生成菌の栄養となる稲わらが水張り前に分解されるため、メタンの発生も抑制できます。

その他の期待される効果

○雑草の減少

○スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の減少

○害虫の減少（害虫の住処となる植物が耕起によってすきこまれるため。）

秋耕のQ&A

Q1. 秋耕はどのくらいの深さで耕せばよいですか？

A1. 地域によって推奨される深さは異なります。

土壌が乾きやすい地域では「深耕」、日本海側など雪が多い地域や排水性のよくない圃場では「浅耕」が一般的とされています。深耕では、根の生育域を広げ、水分や養分を吸収しやすくなり、浅耕では、すき込まれた稲わらがより酸素に触れることで腐熟が進みやすくなるとされています。

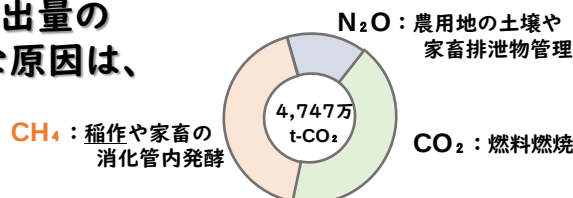
Q2. 秋耕は環境によいと聞きましたが、どうよいのですか？

A2. 日本の農林水産分野の温室効果ガス排出量の

3割弱は稲作が占めています。その主な原因は、メタンガス(CH_4)とされています。

秋耕を実施することで稲わらの腐熟が水張の時期までに十分に進みます。

その結果、メタンガス発生のもととなるメタン生成菌の活動が抑制され、メタンガス排出量低減につながります。



Q3. 土づくりの観点で、稲わらの腐熟を促進する資材はありますか？

また、その資材を使用することでどのようなメリットがありますか？

A3. 翌年産に向けた土づくりとして、石灰窒素の施用が一般的です。

石灰窒素は稲わらの分解を促進する効果が高く、土壌pHを上げたり、地力窒素を高める効果も期待できます。

また、秋耕と同時にケイカルや農力アップを散布することで、アルカリ分による稲わらの腐熟促進とあわせて、稲の生育に欠かせない「ケイ酸」を補うこともできます。

J A山武郡市 おすすめの土づくり肥料・腐熟促進材

目的	商品名	施用量 (10a当り)	特徴
稲わらの腐熟促進	石灰窒素	10~20 kg	微生物の増殖に必要な窒素を20%含む。
	アグリ革命	2 kg	酵素の力によって稲わらの分解を促進。液剤（アクア）は、雑草対策として茎葉処理除草剤（プリグロックスL等）との混用が可能。
	アグリ革命アクア	100 ml	
ケイ酸の補給	ケイカル（粉）	100 kg	ケイ酸31%を含む安価なケイ酸資材。
	農力アップ	60 kg	利用効率が良いため施用量が少なく済む。ケイ酸20%の他、鉄やマンガン等の微量元素も含み、秋落ち対策にも効果あり。
	けい酸加里	40~60 kg	ケイ酸34%と加里20%を含む。根張り向上により倒伏・高温障害対策に効果的。

資材をお求めの方は、お近くの営農・経済センターへお問い合わせください。